

## いま生きて在ることを愉しむ！

●松本伸一さん〔13回〕の訃報に接して！

昨日、春日部地区浦高会でお世話になった松本伸一様〔13回卒〕が5月19日(金)に逝去されたことを知りました。享年80歳、ちょうど私より一回り上の先輩です。今週27日(土)に通夜、28日(日)に告別式が執り行われるとのことで、松本様との思い出をご霊前にお供えしたいと思っております。

春日部地区浦高会の賀詞交歓会〔2月〕と総会〔9月〕は、日曜日の16時半～17時過ぎに開催されることが多く、松本様からは「遅れるかもしれませんが、出席します」というご連絡をいただきました。それは、松本様が主宰されていた陶芸窯と時間が被ってしまっていたからです。2020年9月6日発行の春日部地区浦高会創立20周年誌『喫茶去～特別編』には「陶芸への道」という投稿をいただいておりますので、哀悼の思いを込めてご披露させていただきます。

◇ ◇

## ■「陶芸への道」 高13回 松本 伸一

先ずは創立20周年をお祝い申し上げます。

浦高同窓会は私が越境入学者ということもあり、少々腰が引けておりましたが、春日部地区浦高会が出来、三輪会長(当時)の人柄とリーダーシップ、香田さんの構想力と実行力、そして鳥井先輩のネットワークと行動力、気配りに動かされました。20年・・・今思えば永いようで短い日々でした。その中でも私にとって印象深いイベントは三輪会長の友人のモーターボートで東京下町の川面からの今の街と江戸を見たことでした。今更ながら江戸、東京の成り立ちは、水と川と運河に負っていたことを感じたものでした。好きな江戸の時代小説の理解が深まりました。〔写真左、中央が松本様、右が三輪様、左が宮川様、2012年4月25日〕



さて、この原稿では再度私の趣味「陶芸」に触れたいと思います。一度会員スピーチでお話したこともありましたが、入学一年目の担任・増田三男先生の工芸指導が通底音のように影響したと感じています。「用の美」を考慮した物づくりに40歳から今日まで続けられたのも故増田先生の背中を見ていたからです。

スピーチのレジュメを少し再録してみます。

サラリーマン生活を始めて、昭和45年に職場結婚一男一女をもうけることが出来ました。36歳の時、今まで住んでいた母屋を建て替え、小さい時からの建築家志望の夢のリベンジを果たしました。そして「広報」の仕事へ。後講釈ですが広報の仕事で陶芸につながる三本の糸が有りました。

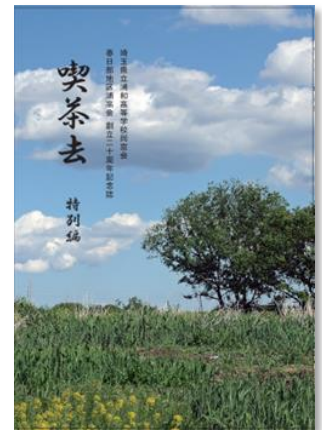
一つは時間の関係です。仕事の一環として野田の町のオピニオンリーダーとの交流が大事でした。「野田青年会議所」会員として活躍。卒業の年・40歳で理事長職を務め、サラリーマンと二足の草鞋を履き、ものすごい過密なスケジュールをこなしました。そのためJC卒業とともに自分としてはかなり時間が空いたわけです。そこで一生続けられる趣味を持つと考えたのです。

二つ目は通産省(当時)が新しく立ち上げた団体で、食卓回り(住宅、リネン、食・食器・テーブルコーディネーター等のメーカー・専門家)が集まる新しいライフスタイルの検討会に参加しました。会では陶器、ガラス器等の工場、工房などの見学ができました。

三つ目は広報の大事な役割として、食文化関係者、料理人、料理学校、食の雑誌の編集者などとのコミュニケーションが有りました。先生方が保持する写真用やデモンストレーション用の食器が目の保養でした。

この三本の糸が、私を「日本陶芸倶楽部」に導きました。〔初代会長・松永安左衛門(電力王、茶人)、初代理事長・谷川徹三(哲学者、茶人)〕爾來30余年同倶楽部の会員としてさらに千葉県美術会会員として焼き物の世界に浸りました。

今現在、野田の自宅には工房と窯を設け、個展や仲間とのグループ展を企画実施致しております。春日部地区浦高会の皆様にもお出で頂き、感謝です。もう少し続けます。 ◇ ◇



そんな松本様から作品集『松本伸一作品集 陶芸を見つけた道 いま生きて在ることを愉しみ歩む』をいただいたのが、昨年の6月のことでした。私の備忘録「夏炉冬扇」第6091号、2022年6月29日『あなたはいまを愉しんでいますか?』には次のように綴りました。一部掲載します。 ◇ ◇

### ■『松本伸一作品集 陶芸を見つけた道 いま生きて在ることを愉しみ歩む』

「はじめに」にはご長男の祐一様から次のような言葉を……。『この本は『アマチュア陶芸家 泥伸(でいしん)』こと、父・松本伸一の作品集です。父がつくった作品をまとめただけでなく、その作品を生み出した父の人生の軌跡が語られています。(中略) こうやって素晴らしい写真と父の語り口を再現した素敵な文章をみると、つくってよかったと思います。そして、父が生涯をつうじて陶器だけでなく、食品メーカーの企業人としての『作品』、野田を愛するまちづくりの『作品』、そして、家族という『作品』を丁寧に大事につくりあげてきたのだということにあらためて感じます』と。息子さんが父親を理解し、そして陶芸だけでなく、仕事を「企業人としての作品」、社会活動を「まちづくりの作品」と理解され、そして「家族という作品」と最大限の賛辞を贈られているのが羨ましい限りですね。さらに第四章で祐一様はこう綴られています。

「この作品集をつくる過程で、父のことを改めて知ると、今の私は父に似ています。昔だったら、そのことを否定していたでしょう。でも、今は血縁や継承といった大げさな話ではなく、純粋にその『つながり』に不思議な安心のようなものを感じています。そして、その『つながり』を大事にしながら、私も家族という『作品』を妻や子どもたちとつくっていきます」と。



「おわりに」で松本伸一様は次のように綴られています。〔2021年2月ご家族4人での箱根旅行写真〕

「広報、まちおこし、陶芸——これらは私の人生を支え、豊かにしてくれた3つの幹です。人生を愉しむことを教えてくれたとも言えます。愉しむことの大切さは、趣味の読書からも学びました。

広報部時代に、作家の城山三郎氏と仕事をする機会に恵まれ、昼食のご相伴にあずかったことがありました。私の自宅の本棚には20数冊の著書がありましたが、迷わず『粗にして野だが卑ではない』の一冊を選んで持参し、サインをお願いしました。元国鉄総裁の石田禮助の伝記で、城山氏の綿密な取材と虚飾のない文章で書か

れた石田氏の飄々とした生き方に共感を覚えていたからです。明治生まれの実業家で、古武士のような佇まいと私心を持たない志の高さ、強い信念とユーモアを持った人生の達人でした。

このような人物は石田氏以外にもいます。石田氏の親友・石坂泰三、昭和を代表する辣腕経営者・土光敏夫、キッコーマンの中興の祖・茂木啓三郎など、すぐに名前を挙げられます。彼らに共通するのは、仕事上の実績もさることながら、人生を大事に愉しんでいたということです。石田氏は農作業、そこから採れる新鮮な野菜、さらに株取引、孫、ブランデーなどエピソードに事欠きません。こんな爺さんと親父のようにゆっくり話をしてみたいものです。

もう一人、作家では辻邦生氏にも随分影響を受けました。初版本は全部持っているはずですが。その歴史小説の一つに『嵯峨野明月記』があります。桃山時代、京都嵯峨野において本阿弥光悦、俵屋宗達、角倉素庵が『嵯峨本』の刊行に情熱を燃やす物語です。宿命を甘受して生の意味を求める書家の光悦(優れた陶芸家でもありました)、自分の心をひたすら絵筆に込める画家の宗達、学問と事業の狭間で懊悩する素庵、3人の独白で構成された独特な小説です。辻氏はこの著作について次のように述べています。

「〈地上に在る〉ことは文句なしに素晴らしいが、これは、死に縁どられ、死によってやがて消される果敢なさのゆえではない。(中略) すくなくとも宗達の活力には、死をさえ楽しもうとする底なしの陽気さ、弾み、疲れなさがある。(中略) 私を思わず腹の底から哄笑させた力・この、死までを喜んで取り入れた全般的肯定感・をいつか作品にすることができたら」このように解題しています。ちなみに、我が家の窯の名前である「太虚窯」は、光悦の庵である「太虚庵」からいただいたものです。

こんな読書をしていると、自分の日々の在り方を嫌でも考えてしまいます。私の生活信条は「いま生きて在ることを愉しむ」です。「生かされている」と言うとは絶対的な存在を考えると、「生きている」と言うとは自分の主体的意思を感じてしまう。そうではなく、自分がいま現在、生きている存在そのものを愉しみたい(楽しむ、ではありません)。迷っている自分、苦勞している自分、解放されている自分、それらを全部ひっくるめて、いとおしく思う。そんな余裕をいつも心に秘めておきたい。随分前からそう在りたいと思ってきましたが、そこが凡人、毎日がつくりくることばかりです。あなたは、いまを愉しんでいますか?

2021年10月吉日 松本伸一 ◇ ◇ 心からご冥福をお祈りいたします。香田 寛美 合掌

